

# 天下一の馬

豊島与志雄

青空文庫



ある田舎いなかの山里に、甚兵衛じんべえという馬方うまかたがいました。至いたつてのんき者で、お金がある間はぶらぶら遊んでいまして、お金がなくなると働きます。仕事というのは、山から出る材木を、五里ばかり先の町へ運ぶのです。ぷーんと新しい木の香りかおがする丸や四角の材木を、丈夫じょうぶな荷馬車にばしやに積み上げ、首のまわりに鈴をつけた黒馬にひかして、しゅんしゅんぱつかばつか……と、朝早くから五里の街道かいどうを出かけて、夕方までには家へ帰って来ます。その馬がまた甚兵衛の自慢じまんでした。何しろ馬方にとつては、馬が一番大切なものです。甚兵衛は親譲ゆずりの田畑を売り払って、その馬を買い取ったのでした。世に珍しいつやつやとした黒毛の若駒わかこまで、背も高く骨組みもたくましく、ひひんといかないで太い尾おを打ち振りながら、ぱつかばつかと街道を進む姿は、見るも勇ましいものでした。多くの馬方の馬のうちでも、一番立派なこの自分の黒馬を、甚兵衛は大層たいそう可愛かわいがって大事にしています。

冬のある晴れた日に、甚兵衛はいつもの通り、材木を荷馬車に積み黒馬にひかして、町

へ出かけて行きました。お昼頃町へ着いて、材木を問屋の庭に下し、弁当を食べ馬にもか  
いばをやり、それから家へ帰りかけました。ところが、空がいつしか曇ってきて、寒い北  
風まで加わって、雪がちらちら降り出しました。甚兵衛は馬を雪にあてないように、途  
中の立場茶屋に二三時間休みますと、幸いにも雪が止みましたので、これならば泊まつ  
てゆくにも及ばないと思つて、急いで家に帰りかけました。けれど二三時間休んだために、  
短い冬の日はもう暮れかけて、おまけに曇り日なものですから、途中で薄暗くなつてし  
まいました。

「これは困つた」と甚兵衛はひとりごとを言いながら、振り向いて馬の首筋を平手で撫で  
てやりました。「こう薄暗くなつちやあ、お前も歩きにくからうし、寒くもあろうが、ま  
あ辛抱しなよ。そのかわり、家へ戻つたらうんどごちそうしてやるからな」

馬はその言葉がわかつたように、ひひんと一声高くいなないて、しゃんしゃんぱかぱか  
と、鈴の音も蹄の音も勇しく、足を早めに歩き出しました。

そうして、人通りの絶えたたそがれの街道を、とある崖の下までやって来た時のこと  
です。崖の裾のくさむらの中から、うっすらと積もつて雪の上に、猫くらの大ききの  
まつ黒なものが、いきなり飛び出して来て、甚兵衛の前に両手をついて、びよこびよこお

じぎをするじやありませんか。

「馬方うまたたの甚兵衛さん、お願いですから、助けて下さい」

初めびつくりした甚兵衛は、話しかけられたのでなおびつくりして、立ち止まってよく見ますと、人間とも猿さるともつかない顔かおつき付をし、体のわりには妙にひよろ長い手足の先に、山羊やぎのような蹄ひづめが生えていて、まっ黒な一重ひとえの短い胴着どうぎの裾すそから、小さな尻尾しっぽがのぞいていました。

「おやあ、変な奴だな」と甚兵衛じんべえは言いました。「お前は一体何だい？」

「山の小僧こぞうですよ」

「山の小僧だつて？」

その時甚兵衛は、ある書物の中に書いてあった絵を思い出しました。顔が人間と猿の間で、手足の先が山羊やぎのようで、小さな尻尾しっぽがあつて、まっ黒な胴着どうぎをつけてるのが、悪魔あくまの姿として絵に書いてあつたのです。

「嘘を言うな」と甚兵衛は言いました。「お前は悪魔の子供だろう」

「ええ、悪魔の子供です。山の小僧とも言うんです」

「あはは、悪魔の子供か」と言つて甚兵衛は笑い出しました。「悪魔の子供が、何だつて

こんな所にまごまごしてるんだい？」

そこで悪魔の子は訳を話してきかせました。それによると、この悪魔は、一週間ばかり前の暖かい日に、五六人の仲間と一緒に山から出て来て、田畑の中を駆け廻ったり土の下にもぐったりして、おもしろく遊んでいましたところが、遊びにまぎれてうっかりしてるうちに、一匹の猟犬からふいに尻尾へかみつかれしました。ようようのことで猟犬から逃れはしましたが、悪魔に一番大切な尻尾の先を、半分ばかりかみきられて、宙を飛んだり物に化けたりする術を失ってしまい、その上仲間の者とはぐれてしまつて、仕方なしにその崖下のくさむらに隠れているのでした。何しろ尻尾の先にひどい傷を受けたものですから、魔法の力を失つてしまつて、遠い山奥に帰ることも出来ないし、夜になつて食物を探しに出かけると、多くの犬に吠え立てられるし、寒い晩には尻尾の傷跡が痛んでくるし、どうにも仕方がなくなつたのです。そして一週間の間、飢えと寒さと痛みとに苦しめられて、崖下で震えている所へ、甚兵衛が通りかかったのを見て、たまらなくなつて飛び出したのです。

「お願いですから救つて下さい」と悪魔の子は地面に頭をすりつけて頼みました。

なるほどよく見ると、体はやせ細り、尻尾の先には生々しい傷があつて、寒さにぶる

ぶる震えています。

「俺おれはまだ悪魔を助けたことがないが、どうすればいいのか」と甚兵衛はたずねました。

「なに造作ぞうさくもないことです」と悪魔の子は言いました。「あなたの馬は実に立派で、まっ黒な毛並みがつやつやしてるから、私は一目ひとめで好きになってしまいました。それで、その馬の腹をしばらく貸して下さい。長い間ではありません。二月いっぱいまででいいんです。三月になればもうだいぶ暖かになりますし、それまでには尻尾の傷もなおりますから、私は自由に飛び廻れるようになります。それまでの間、私をその馬の腹の中に住まわせて下さい。悪魔の王に誓っても、決して害はいたしません。害をしないどころか、私が腹の中に住んでる間は、あなたの馬を十倍の力にしてあげます。どうぞお願いします」

それを聞いて、甚兵衛はひどく当惑とうわくしました。大事に可愛かわいがってる黒馬の腹を、悪魔の宿に貸そうなどは、夢にも思わないことでした。けれどもそれを断ことわれば、悪魔の子はきつと飢え死にか凍こじえ死にかするに違いありません。いくら悪魔だからといって、そんなに頼むのを見殺しにも出来ません。その上宿を貸したとて、別に害はしないで、馬の力を十倍にしてくれるというのです。はてどうしたものかと甚兵衛は思案しあんにあぐんで、この上は馬と相談の上だと考えて、馬の首をなでながら、どうしたものだろうとたずねてみまし

た。黒馬はその言葉がわかったかどうか、うなづくように頭を振っています。

「馬が承知のようだから、宿を貸してあげよう。そのかわりに約束を守って、二月の末までだぞ」と甚兵衛じんべえは言いました。

悪魔あくまの子は大層たいそう喜びました。甚兵衛が馬の口を開けてやると、いきなりぴよんと飛び込んで、腹の中にはいってしまいました。それを見て甚兵衛は、あはははと声こゝろ高たかに笑い出しました。

ところが驚いたことには、甚兵衛が馬に一鞭ひとむちあてて帰りかけると、その馬の足の早いこと、まるで宙を飛ぶように進んで行きます。甚兵衛はとても追いつかないので、馬車ばしゃの上うへに飛び乗りますと、黒馬はひひんと高くいなないて、またたくまに家まで駆け戻りました。

## 二

その翌日から大変です。悪魔の子が言った通りに、甚兵衛の黒馬は十倍の力になって、材木を山のように積んだ荷車を、坂道も何も構いなく、がらがらと駆け通しにひいて行き



ます。町まで五里の道を往復するのに、今まで一日かかっていましたのに、その日からはいくらかたくさん材木を積んでも、三度ぐらいは平気で往復するようになりました。甚兵衛は歩いてはとも追っつけませんので、往いきも帰りも車の上に座り通しでした。これは素す敵てきなことになったと、甚兵衛はひどく喜んで、上等のかいばや麦や米や豆などを、毎日馬にごちそうしてやりました。馬の黒い毛並みはなおつやつやとしてきて、以前にも増して立派になりました。

さあそうになると、村でも町でも大評判です。甚兵衛の馬が山のように材木を積んだ荷車をひいて、山坂を自由自在に駆け通して、五里の道を日に三度も往復するのを、皆眼を丸くして眺めました。中には甚兵衛じんべえに向かつて、どうして馬がそう強くなったかとか、いくらでも金を出すから馬を売ってくれないかとか、いろんなことを言い出す者もありましたが、甚兵衛はただ笑って取り合いませんでした。

「天下一てんかいちの黒馬だ。はいどうどう……」と甚兵衛は得意げに馬の手綱たすなをさばきました。

そして元来なまけ者ののんきな甚兵衛も、馬を走らせるのがおもしろくなって、毎日材木を運びましたので、大変お金をもうけました。雪がひどく降る日なんかは、さすがに休もうと思いましたが、馬の方で休むことを承知しません。朝早くから馬小屋の中で跳ね上

がったりいなないたりして、どんな天氣の悪い日にも勇しく出かけて行きました。

ところが、二月の末に近づくにつれて、馬の腹がだんだん大きくなつてきました。甚兵衛はびつくりして、その大きな腹を撫でてやつたり、馬の病気に利くという山奥の隈笹を食べさせたりしましたが、何のかいもありませんでした。仲間の馬方達に見せても、どうしたのか誰にもわかりませんでした。甚兵衛は大層心配しましたが、どうにも仕方ありません。これはきつと腹の中の悪魔の仕業だろうとは思いましたが、二月の末までと約束したのですから、今更取返しはつきませんでした。それに、馬はただ腹が大きくなつたばかりで、体にも元氣にも少しも衰えは見えませんでした。

「まあいいや、二月の末まで待つてみよう。害はしないとあいつは約束したんだから、たいてい大丈夫だろう」

そして甚兵衛は、二月の末になるのを待ち焦がれました。馬は相変わらず元氣で、毎日材木の荷車をひきました。

いよいよ二月の末になりますと、甚兵衛じんべえはほっと安心して、その日一日馬を休ませ、せつかくのことだから今晚まで悪魔あくまに宿を貸そうと思つて、そのまま馬を小屋につないでおき、うまいごちそうを食べさせて、自分は早くから寝てしまいました。

するとその翌日、三月一日の夜明け頃、馬小屋で馬がひどく暴れてる音がしたので、甚兵衛はびつくりして起き上がりました。行つてみますと、馬は歯をくいしばつて、時々苦しそうに跳ね廻つています。いくらそれを静めようとしても、どうしても静まりません。甚兵衛は訳がわからなくて、まごまごするばかりでした。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」

どこからか自分を呼ぶかすかな声がありましたので、甚兵衛はびつくりしてあたりを見廻しましたが、誰もいませんでした。するとまたどこからか、かすかな声がありました。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」

その声がどうやら、馬の口から出てくるようでしたから、甚兵衛は馬の口に耳をあててみました。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」

その声で甚兵衛は急に思い出しました。

「やあ、お前は悪魔の子だな。何だつてまだ馬の腹の中にまごまごしてるんだい。もう三月一日だぜ。約束の期限はきれたから、早く出て来いよ」

すると馬の口の奥から、悪魔あくまの子が言いました。

「実は困ったことが出来たんです。いい気持ちで馬の腹の中に住んでいまして、毎日ごちそうをたくさん下さるので、のんきに構え込んでいますうちに、期限が来たのでいざ出ようとすると、私はまるまると肥って大きくなつたと見えて、馬のどにいつぱいになってしまふんです。無理に出ようとすれば出られないことはありませんが、馬が苦しいと見えて、この通り歯をくいしばって暴れて困ります。ですから、馬に一つ大きなあくびをさして下さいませんか。あくびをして口とのどとを大きく開いた拍子ひょうしに、私はひよいと飛び出しますから。さもなければ、いつまでも馬の中に住んでるか、または腹を食い破つて出るかだけです。そのかわりあくびをさして下さると、この馬を百倍の力にしてあげましよう」

「なるほど、それじゃあ馬にあくびをさせるから、静かにして待っていてくれ」と甚兵衛は答えました。

ところが、馬にあくびをさせるのが大変です。第一馬のあくびなどというものを、甚兵

衛はまだ見たことがありませんでした。脇腹をつついたり、鼻の穴に棒切れをさしこんだりしてみましたが、馬はくすぐったがったり、くしゃみをするきりで、あくびをする気配さえありませんでした。それかってこのままにしておけば、悪魔の子が馬の腹の腹の中ですます大きくなつて、自然に腹が裂けるか腹を食い破られるか、どちらかになるかより外はありません。親譲りの田畑を売った金で買った黒馬が、天下<sup>てんかいち</sup>一と自慢していた見事な黒馬が、そんなことになつたらどうでしょう。甚兵衛はこれには途方<sup>とほう</sup>にくれてしまいました。

「馬にあくびをさせることを知ってるものはいませんか」

そう言つて甚兵衛<sup>じんべえ</sup>は、仲間の馬<sup>うまかた</sup>方や村の人達の間をたずね廻りましたが、誰一人としてそんなことを知ってる者はいませんでした。甚兵衛はがっかりして家に戻つてきて、とんだことになつたと溜息<sup>ためいき</sup>をつきながら、しみじみと馬の顔を眺めました。この馬はやがて悪魔<sup>あくま</sup>のために腹を破られるのかと思うと、悪魔に宿を貸したのが後悔されたり、馬と別れるのが悲しくなつたりして、いつまでも一心に馬の顔を眺めていました。馬は重そうな大きな腹をして、やはり甚兵衛の方を悲しそうに見ていました。

するうちに、馬の顔を一心に見入っていた甚兵衛は眼がくたぶれてきてぼんやりして、

思わず大きなあくびを一つしました。それにつれて馬も一緒にはーつと大きなあくびをし始めました。はつと気付いた甚兵衛が、しめた！ と叫ぶと同時に、馬の大きな口から、まるまる肥え太った悪魔の子が、ひよいと飛び出してきました。

「甚兵衛さん、長々馬の腹を借りて、ほんとにありがとうございました。お礼のしるしに、これからあなたの黒馬は百倍の力になりますよ」

びよこんと不格好なおじぎをして、傷のなおった尻尾しっぽを打ち振りながら、宙に飛びあがったかと思うまに、悪魔の子はどこへともなく飛び去ってしまいました。

その後姿を見送って、甚兵衛はあつけにとられてぼんやりしていましたが、ひひんと一声高く馬がいなないので、初めて我われに返って、馬の頭を撫なでてやりながら、あはははと大声に笑い出しました。

それからというものは、甚兵衛の黒馬は、百人力……百馬力になって、たいそうな働きをしました。世間せけんの人達はあきれ返りました。甚兵衛一人は澄すましたもので、いつも謎のような鼻唄を歌って、街道かいどうを往ゆき来しました。

悪魔あくまだからといたって、

困ってるなら泊めてやれ。

悪魔の子供を呑み込んで、

あくびと一緒に吐き出した、

天下第一の黒馬だ。

はいどうどう、はいどうどう。





# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 天下一の馬

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>